

ヒメジャノメは分類学的にはタテハチョウ科ジャノメチョウ亜科に区分される種で、この仲間にはみんな図のように羽に目玉模様があり漢字では「蛇の目」と表記されます。一般に鳥類はこ



うした目玉模様を恐れるらしく、チョウはこの目玉模様で鳥を驚かせて身を護っているという見方があります。「蛇の目」：二重丸の中を塗りつぶした図形と定義されていますが、実際にヘビの目はクリクリとした愛嬌のある目でしょうか。とんでもありません。まぶたが重くて眠たいという感じで、決してパッチリと見開いてなんかいません。むしろ、鋭く光るタカ目ならジャノメチョウの模様といくらか似ていて、鳥が目玉模様を嫌うのは獰猛なタカ目をおもわせるからだという説はどうでしょうか。その場合、タカノメチョウとな

ってしまいますが。ジャノメチョウ属には一定間隔で羽の開閉を繰り返す習性があって、閉じていた羽を急に開くと鳥の眼前に大きな”眼”が現れ、驚いた鳥は一瞬攻撃をためらい、そのすきにチョウが難を逃れるという眼状紋効果が想定できますが、目玉模様のある部分を鳥についばまれたと思われるジャノメチョウ類が野外で観察されることもあるので話はややこしくなります。急所かどうか分かりませんが、敵の目を攻撃して戦意を喪失させるという戦法はじゅうぶんありえます。そういう外敵に対してジャノメチョウ類は実際に目がある頭部分から遠い羽に偽装としての目玉模様を設けており、鳥が目玉だとおもってつついた瞬間ヒョイツと飛び去れば、鳥は何が起こったのかと目を丸くするにちがいません。

さて、ヒメジャノメですが、ひまわり公園のアジサイの葉っぱで休んでいるのを見かけ、急ぎビデオ撮影をしました(脚が4本しかないのを不思議に思いませんか？昆虫は6本脚のはずです。実は、タテハチョウ科に属するチョウは前脚が退化していて脚としては4本しか使えないのです。前脚は味覚などの感知に利用されるようで、インガケチョウの♀が食樹であるイヌビワの葉っぱを確か前脚だったと思うのですが、忙しく叩くしぐさ(tapping)を繰り返してから産卵するのを見たことがあり、葉っぱが産卵するのに適したものかどうかを、叩くという刺激でなんらかの識別成分を発生させて確認しているように見えました)。

幼虫の食草となるイネ科のススキ、メヒシバ、エノコログサなどは身近な草原のあちこちにあるのですが、このチョウを身近に見たのは2008年6月11日(松波町)と2013年6月25日(荒



井町浜風公園)の二度だけで、山里から離れた市街地にまで飛来した経緯はミステリーです。羽裏には縦に白い筋模様があって、目玉模様とあわせてじっくり眺めると、なかなか味のあるきれいなチョウです。奄美大島から八重山諸島にかけて全体のデザインがヒメジャノメとそっくりの色調が濃くていっそうきれいなリュウキュウヒメジャノメがいますが、静岡高校生物担当の高橋真弓

先生が、奄美大島から八重山諸島にかけて生息する当時亜種とされていたヒメジャノメについて交配実験を繰り返し、生まれた幼虫が続々と死ぬとか、通常5回の脱皮後に蛹となるどころ4回で蛹になるなどの異常を認めて別種かもしれないと研究を進め、リュウキュウヒメジャノメとして分離独立すべきことを明らかにされました。実に4年間という大変な努力の結果です。

